

Program プログラム

モーツァルト
W.A. Mozart

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲
“Don Giovanni” Overture

ハチャトゥリアン
Aram Khachaturian

組曲「仮面舞踏会」
Masquerade Suite

==== 休憩 Intermission ====

シベリウス
Jean Sibelius

交響曲第2番 ニ長調 作品43
Symphony No.2 in D major Op.43

曲目のこと

尾崎 正峰

W. A. モーツァルト (1756～91)

歌劇『ドン・ジョヴァンニ』序曲 K.527

みなさんは、チェコの首都、プラハに行かれたことはあるでしょうか？

解説子にとっては、前々から訪れてみたいと念願している都市のひとつなのですが、なかなか機会に恵まれずにおります。

それはさておき、プラハは、かのモーツァルトを語る時、欠かすことができないエピソードを生み出した街として記録・記憶されるものであります — そのこともあってでしょうか、大ヒットした舞台劇『アマデウス』の映画化にあたって、屋外ロケの大半は、中世さながらの町並みや建造物が数多く残されているプラハで行われました —。

モーツァルトの歌劇作品の中でも人気の高い『フィガロの結婚』。その初演は、1786年5月1日、ウィーンのブルク劇場で行われました。ある程度の評判を得たものの、ポーマルシェの原作が貴族批判、階級批判の色合いが濃かったことも影響して、いかに時の皇帝ヨーゼフ2世の上演許可があったとはいえ、早々と舞台から下ろされてしまいました。

しかし、「捨てる神あれば拾う神あり」。同年12月のプラハでの上演が大成功を収め、モーツァルトはプラハから招待を受けることとなります。翌87年1月8日早朝にウィーンを発ち、11日昼にプラハに到着したとされますが、着いてみてビックリ。街中にフィガロの音楽があふれていました。ウィーンの友人への手紙で「ここでは『フィガロ』の話でもちきりで、弾くのも、吹くのも、歌や口笛も、『フィガロ』ばかり、『フィガロ』の他はだれもオペラを観に行かず、明けても暮れても『フィガロ』

『フィガロ』だ。たしかに、ぼくにとってはおおいに名誉だ」（『モーツァルトの手紙』(下)、岩波文庫)としたためています。

各方面からの歓待の中、19日には、モーツァルト自身の指揮で交響曲第38番 K.504 が初演されました。このことから、この作品は「プラハ」のニックネームで親しまれています（ただし、プラハ楽旅のために作曲されたのではないようです。彼自身の作品目録によれば、この交響曲は、前年の12月6日、ウィーンで完成されており、ウィーンで演奏するつもりだったのではないかといわれています）。その3日後の22日、自ら『フィガロの結婚』を指揮し、大好評を得ます。上演された劇場は、国民文化を担う文化の殿堂として1783年に創建されたばかりのものでした（現在は、チェコ語で「スタヴォフスケ劇場」と呼ばれていますが、日本では英語表記の「エステート劇場」の方がなじみが深いでしょうか）。この人気に目をつけた劇場興行師パスクワレ・ボンディーニから、次のシーズンのためのオペラの作曲を依頼され、生み出されたのが歌劇『ドン・ジョヴァンニ』です。

ここで、いつものように「遠回りのお話」を。

ところで、「なぜプラハで？」と不思議に思われませんか。つまり、今の私たちから見れば、ウィーンはオーストリアの首都、プラハはチョコ共和国の首都。鉄道もなく、旅には不便と危険がつきまとう時代なのに、わざわざ国をまたいで何度も行き来したのか、と。

この謎を解くためには二つの都市をめ

ぐる歴史を見ていかなければなりません。では、どこまで時代をさかのぼればいいのか。いろいろな考え方がありますが、ここでは思い切って、現代から700年ほど時計の針を戻してみましょう。

時は1316年、プラハでひとりの男の子が誕生します。父親は神聖ローマ皇帝ハインリヒ7世の息子でチェコ王のヨハン、母親はチェコの王家プシェミスル家のエリシュカ、という高貴な家柄の嫡子でした。この子は、長じて、神聖ローマ皇帝カレル4世となります。彼は、7歳でパリに赴きフランス王の宮廷で教育を受け、イタリアで政治や軍事について修めるなど、21世紀の現代の目から見ても「国際派」と形容しうる逸材でした。

ここで、カレル4世の神聖ローマ皇帝の戴冠をめぐるエピソードをひとつ。1350年、ローマの護民官コラ・ディ・リエッツォが、早期のローマ訪問を要請するためにプラハの宮廷を訪れました。何を隠そう、彼こそは、昨年の定期演奏会で取り上げたワーグナーの『リエッツォ』序曲、その歌劇の主人公のモデルとなった人です。

チェコ王であると同時にドイツ王、そして神聖ローマ皇帝、すなわち、カトリックの世界の最高君主となったカレル4世は、チェコ、ドイツ、オーストリアなど広大な帝国の統治をはかりました。彼は、プラハをその拠点ととらえ、幼いときに過ごしたパリのような都市にすることに意欲を見せ、市街地の開発に取り組みました。また、1348年、中部ヨーロッパで最古のプラハ大学を創設しました。こうした施策の結果、プラハは14世紀半ばにはヨーロッパ有数の大都市となり、「黄金のプラハ」とまで称されました。

カレル4世の死後、領土、権力、宗教等をめぐるさまざまな戦乱を挟んで、次なる栄光の時代を担ったのがハプスブルク家。フェルディナント1世（在位1526～64）以来、1918年まで、神聖ローマ皇帝、およびオーストリア、チェコ、ハンガリー三

国の君主の地位を継承していきます（史実を細かく見れば、1806年、神聖ローマ帝国は名実ともに消滅しましたが、オーストリア帝国、そして、オーストリア＝ハンガリー帝国として存続します）。その間のプラハはといえますと、帝国内における重要性は若干下がった面はありましたが、数多くの遺産が引き継がれていきます。ハプスブルク家にとっても、プラハがウィーンに次ぐ重要な宮廷都市であった時期もありました（より詳しくお知りになりたい方は、薩摩秀登『物語チェコの歴史』中公新書、をどうぞ）。

このように、モーツァルトの生きた18世紀には、すでにウィーンもプラハも同じ帝国の版図に属する長い時間を共有し、さまざまな意味で共通の文化的土壌の上に立っていたわけです。ですので、モーツァルトがプラハを訪れることは、今でいう「地方公演」ぐらいの感覚であったといってもいい過ぎではないと思われます。

さて、『ドン・ジョヴァンニ』に話を戻しましょう。

数多くの女性を籠絡し、放蕩の限りを尽くす男が、その罪深さゆえに罰を受け、地獄に落とされるというテーマ。このテーマを題材にした舞台作品は、モーツァルトが初めてではありません。モーツァルトがプラハを訪れた年、1787年の2月にジョゼッペ・ガッツァニーガ作曲のオペラ『ドン・ジョヴァンニ・テノーリオまたは石像の客』がヴェネツィアで初演されています。さらにルーツを探っていくと、スペインの僧侶ガブリエル・テレスが、「ティルソ・デ・モリナ」のペン・ネームで書いた劇作品『セビリャの色事師または石像の客』にたどりつきます。この作品は1613年にマドリッドで初演され、大成功を収め、以後、イタリア、フランスにも広まります。この作品をさきがけとして、フランスの劇作家モリエール（1622～73）の喜劇『ドン・ファンまたは石像の客』（1655年、パリで初演）、「精霊たちの踊り」で有名なグルック

(1714～87)のバレエ『ドン・ファン』(1761年、ウィーンで上演)など次々に作品が生み出されます。モーツァルト以後では、ドイツの作家E. T. A. ホフマン(1776～1822)の小説『ドン・ファン』、ロシアの作家プーシキン(1799～1837)の劇『石像の客』、ドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウス(1864～1949)の交響詩『ドン・ファン』など、このテーマは、さまざまなジャンルの芸術家の創作意欲を刺激するようです。

『フィガロの結婚』の台本を手がけたダ・ポンテ(1749～1838)が、続く新作にこのテーマをモーツァルトに勧めた裏には、前述のガッツァーニのオペラがイタリア中で成功を収めていたことがありました。1787年3月に台本の一部を受け取り、さっそく作曲に取りかかり、10月4日に再びプラハを訪れたモーツァルトは、知人の別荘に滞在しながら作曲を続けました。ウィーンと比べると出演者やスタッフの数が限られているプラハの劇団の状況もあり、完成にやや手間取り、初演の日程が何度も延期されましたが、10月29日に『フィガロの結婚』上演と同じ劇場で、モーツァルト自身の指揮で行われました。この作品もプラハの人々には好評で、11月にモーツァルトがプラハを去る日まで続けざまに上演されました。

『フィガロの結婚』をウィーンよりも高く評価し、多くの市民が彼の来訪を歓迎し、『ドン・ジョヴァンニ』と『皇帝ティトゥスの慈悲』(1791年9月、新皇帝レオポルト2世のチェコ王としての戴冠式祝賀のため)作曲の依頼とその初演を行ったプラ

ハという街には、モーツァルトの長くはない人生の最後の5年間の足跡が深く刻印されています。

今日演奏する「序曲」については、初演の日の前夜、妻コンスタンツェに飲み物を作ってもらったり、彼女に物語を語ってもらったりしながら一晩で書いてしまったという、真偽のほどは疑わしいものですが、いかにもモーツァルトらしい逸話が残っています。

序奏部では、歌劇の最初の部分でドン・ジョヴァンニとの決闘で命を落とした騎士長が、終結部で彼を地獄へと誘う石像として姿を現わす場面の音楽を中心に、不気味な雰囲気が醸し出されます。切れ目なく軽やかなアレグロの主部に入ります。ドン・ジョヴァンニの女性遍歴の放蕩ぶりとその快楽の様を描いているとされていますが、そんな境遇に立ったことのない解説子は、その点は理解できないまま演奏しています。あしからずご了承を。

曲の終わり方にはいくつかのヴァージョンがあります。まず、オペラの舞台上演の場合は静かに終わるヴァージョンが用いられます。もうひとつは、1970年代ぐらいまでの録音に親しまれている方にはなじみ深いものだと思いますが、他者の手による「演奏会用終結部」として広まっていたものです。そして、今日演奏するヴァージョンは、1788年のウィーンでの上演の際にモーツァルトによって書かれたといわれるもので、最近では、ほとんどの演奏会で、こちらが用いられます。

(演奏時間：約7分)

A. ハチャトゥリアン (1903～78)

組曲《仮面舞踏会》

ロシアの音楽は、日本においてたいへん人気の高いジャンルといえるでしょう。クラシックの作曲家に限っても、チャイコフスキーを筆頭に、ムソルグスキー、ボロデ

イン、リムスキー＝コルサコフ、ラフマニノフ、グラズノフ、ストラヴィンスキー、ショスタコーヴィッチ、プロコフィエフ、そして、今日演奏するハチャトゥリアン

等々、十指に余る名前をすぐに挙げる事ができると同時に、「ロシア」と十把一絡げにすることがはばかれるほど多彩な顔ぶれがそろっています。

人気の高さの由来は、それぞれの音楽の魅力そのものにあるといえますが、ロシアの歴史、風土、文化等への人々の親近感のようなものが土台にあるような気もします。その点を日本社会の戦後過程と結びつけて考えてみると、あることが解説子の頭に浮かびます。それは〈うたごえ運動〉です。ある年代以上の方々には懐かしく響く言葉でしょうが、解説子も〈うたごえ運動〉そのものではなく、大学生時代（ほぼ四半世紀前）に「うたごえ喫茶」なるものに触れた程度ですので、今の若い世代にとっては「何、それ？」というところでしょうか（昨今、「うたごえ喫茶」リヴァイヴアルの動きもあるようです）。

〈うたごえ運動〉は、1948年、中央合唱団が関鑑子（あきこ）さんの指導のもとに創設され、全国的な演奏活動を行うようになったことに端を発します。中央合唱団の各地での演奏会開催と共に聴衆への歌唱指導などを通して、合唱運動としての輪を広げ、1953年11月には「第1回日本のうたごえ祭典」が開催されるまでになりました。この時期から、作曲家の芥川也寸志さんをはじめとして、林光さん、間宮芳生（みちお）さん、外山雄三さんといった方々、つまり、当時の若手の優れた音楽家たちが〈うたごえ運動〉に結集し、そのことが高い質の音楽と民衆とを結びつけたといえます。戦後過程で特筆される文化運動、社会運動として幅広い分野で取り上げられてきましたが、音楽学（日本音楽史）の領域においては、運動の政治的背景、イデオロギー性ゆえに必ずしも正当に取り上げられてきませんでした。ようやく最近になって、「再」評価がなされるようになってきました（ちょっと大部のものですが、『日本戦後音楽史』上下巻（平凡社）が2007年に発刊されたことをきっかけに、昨年、

これまた大著の長木誠司『戦後の音楽』（作品社）が出版されました。一般的には、渡辺裕『歌う国民』中公新書、が手頃でしょう）。

〈うたごえ運動〉では『青年歌集』という歌集が用いられ、運動が最高潮であった1955年頃は70万部を超える売り上げで、「隠れたベストセラー」と言われるほどでした。1953年以来、第10集まで刊行された歌集に、「ラ・マルセイユーズ」や「インターナショナル」などの革命歌、労働歌が盛り込まれていたことは、運動の性格上当然ともいえますが、その中核的なレパートリーは「ロシア民謡」でした。捕虜生活を終えソ連各地から引き揚げてこられた方々が抑留中に覚えて持ち帰った歌も多くありました。こうして、若者を中心に全国至る所で歌い継がれ、ロシアの文化への想い、そして音楽が日本の社会に広まったといえるのではないのでしょうか。

ところで、『青年歌集』などでロシア「民謡」とされていたものの多くが、実は、現代の「流行歌」でした。たとえば、「カチューシャ（りんごの花ほころび・・・）」は1938年にジャズ楽団のために書かれたもので、その後、スペインのパルチザンやフランスのレジスタンスの間でも歌われ、世界的に有名になりました（この点については、山之内重美『黒い瞳から百万本のバラまで』（東洋書店）をご覧ください。「目からウロコ」ですよ）。こんな“オチ”もありますが、ともあれ、ロシアの音楽は私たちにとって身近な存在といえるでしょう。

ハチャトゥリアンは、小学生の運動会のBGMとしてトップクラスの「剣の舞」の作曲者として広く知られています。グルジアに生まれ、18歳までは楽譜も読めなかった彼が、1921年、モスクワ音楽院のホールでラフマニノフのピアノ協奏曲第2番とベートーヴェンの第9交響曲を聞いたことをきっかけに作曲家になることを決意します。1922年にグネーシン音楽専門学校チェロ科に入学し、1925年に作曲科

に移ります。その後、1929年にモスクワ音楽院に進み、注目されるようになりました。1940年に名ヴァイオリニスト、ダヴィッド・オイストラフの独奏で初演されたヴァイオリン協奏曲は大成功を収め、その後、ソ連を代表する作曲家としての道を歩みます。

ここでは、彼と日本との関わりを見てみたいと思います。

ハチャトゥリアンは、1963年に日本を訪れ、前年に創設されたばかりの読売日本交響楽団、そして、京都市交響楽団を指揮して、交響曲第2番、ヴァイオリン協奏曲（独奏：レオニード・コーガン）、ピアノ協奏曲（独奏：レフ・オボーリン）、バレエ《ガイーン》、バレエ《スパルタクス》などの自作を演奏しています。

1963年、すなわち昭和38年とは、どんな時代だったのでしょうか。大きな出来事をアトランダムに拾ってみますと、日米間で初の衛星中継実験に成功し（11月23日）、その最初に伝えられたニュースがケネディ・アメリカ大統領暗殺事件でした。この年にヒットした流行歌は、梓みちよ「こんにちば赤ちゃん」、坂本九「見上げてごらん夜の星を」、舟木一夫「高校三年生」、など、今に至るまで歌い継がれている名曲の数々。また、解説子としては、国産連続テレビアニメ第1号である「鉄腕アトム」の放映開始をはずすわけにはいきません。そして、翌年に開催される東京オリンピックのための工事で「東京中が掘り返された」と表現されたほどでした。

このように、高度経済成長が本格化し、日本の社会が大きく変わろうとする時代であり、クラシック音楽界も、海外の著名な演奏家が続々と日本を訪れるようになった頃でした。ハチャトゥリアンの来日は、そんな日本社会の大きな変動の中で実現したものでしたが、当時の人々にどのように受けとめられたのでしょうか。『読売新聞』の当時の紙面をくくってみて、その様子の一端をのぞいてみましょう。

1月29日の来日以前から頻繁に大きく記事として取り上げられていますが、2月9日（東京文化会館）と20日（東京厚生年金会館）の演奏会の前後は連日のように彼の動静が掲載され、演奏会直前の2月7日夕刊には、ほぼ一面全部を使って、ハチャトゥリアンと芥川也寸志さん、そして音楽評論家の園部三郎さんによる座談会「ソ連の音楽と背景」が掲載されています——芥川さんは、1954年からソ連に滞在し、ハチャトゥリアンと交友を結んでいました。東西冷戦のまっただ中のソ連行きは（言葉は悪いですが）ほとんど“密航”まがいでしたが、その出だしがふるっています。まだ米ソ英仏の四ヶ国管理下にあったウィーン。“渡し屋”といわれる輩にお金をつかませ、アメリカ地区から地下道に入り、そこを通過してソビエト地区に抜け出たということです。往年の名画『第三の男』（1949）のクライマックス場面で、名優オーソン・ウェルズ扮するハリイ・ライムが下水道を逃げ回るシーンを連想してしまう芥川さんの“密航”の“武勇伝”の続きは、『芥川也寸志—その芸術と行動』（東京新聞出版局）所収のご自身の言葉でお確かめください——。

このように、いやが上にも期待が盛り上がる中、1曲につき30時間の猛練習が課されたという演奏会に対する論評は、「情熱のタクト、流れる旋律」（2月10日朝刊）とタイトルが付され、絶賛の嵐という感じでした。高名な文芸評論家・河上徹太郎さんも「“ロシア”は生きている」（2月11日朝刊）の見出しで長文の演奏会見聞録を寄稿しています。河上氏が、できたばかりの日本のオケにしては「ダイナミックな音量」に驚いたことに対して、幕間に藤原義江氏が「バターやチーズや牛肉をふんだんに食べてできた音だからな」と評したことは、ビフテキ好きの我が名テナーらしいのでしょうか。いずれにしても、新生のオーケストラとロシアの大作曲家との出会いは、当時の日本の音楽シーンを華やかに彩

ったといえます。

今日演奏する《仮面舞踏会》は、ヴァイオリン協奏曲と同じ年、1940年にミハイル・レールモントフ（1814～41）の戯曲の劇音楽として作曲されました。戯曲は、帝政ロシア末期の貴族社会の特異なあり方への批判を基調としています。主人公の賭博師アルバーニンが妻ニーナと仮面舞踏会に出かけますが、そこでニーナは腕輪をなくしてしまいます。これを拾った男爵未亡人が、自分に言い寄る若い公爵をあしらうため日くありげに腕輪を渡します。これを目撃したアルバーニンは、自分の妻が不貞をはたらいていると思いこんでしまいます（仮面をつけているため誰だか分からないということが前提です）。嫉妬にかられた彼は、ついにはニーナを毒殺してしまいますが、自らの誤解であったことを知り、強い自責の念にかられ気が変になってしまう、というたいへん悲劇的なものです。戯曲そのものは第二次世界大戦の開始とともに上演の機会はなくなりましたが、1944年に、彼自身の手で交響的組曲に編み直され、今日に至るまで広く親しまれています。

1. ワルツ *Tempo di Valse*

《仮面舞踏会》の中心的な楽曲ですが、フィギュアスケートの浅田真央選手が演技のための曲として用いたことでさらに有名になりました。モスクワ音楽院での彼の告別式の際、この曲が演奏されました。

2. ノクターン（夜想曲） *Andantino con moto*

仮面舞踏会の一件から妻への不審を抱きつつ一足先に帰宅したアルバーニンが、過ぎ去りし日々を追憶し、今の境遇を独白する場面の音楽です。彼の揺れ動く心情そのままに、叙情的でありつつも憂愁感が横溢し、ときに激情的にもなるメロディがヴァイオリン独奏によって奏でられます。

3. マズルカ *Allegro*

ポーランドの民族舞曲の形式で、3/4拍子の軽やかな音楽です。中間部は、木管楽器とヴァイオリンとの対話に、ヴィオラ、チェロ、オーボエによる対旋律が加わります。

4. ロマンズ *Andante*

もともとは、ニーナによる劇中歌です。深い愁いを含んだ印象的なメロディが、最初はヴァイオリン、そして、ヴィオラとチェロに引き継がれます。中間部で木管楽器がやや明るい曲調を導きますが、再び冒頭のメロディがトランペットのソロで奏でられます。

5. ガロップ（ギャロップ） *Allegro vivo*

この曲も運動会にはピッタリの躍動感あふれる音楽です。短い序奏の後、木管楽器のテーマが現れます。「ちょっと変な響きだな？」と思われませんか。短2度（半音）の和音をわざと使ってコミカルな雰囲気を出しています。途中、拍子が変わって、ちょっとずっこけた感じになるのはご愛敬でしょうか。

（演奏時間：約18分）

J. シベリウス（1865～1957） 交響曲第2番 ニ長調 作品43

小学生の頃、「地中海に長靴の形で突き出ているヨーロッパの国」と覚えたイタリア。

この国にも行ってみたいとかねがね思っているのですが（イタリアの場合、首都ローマだけでなく、他にも歴史と伝統のある都市がたくさんありますね）、プラハ同

様、まだ行ったことはありません。古代ローマの時代、そしてルネサンスがもたらした数々の文化的遺産、日常生活に根づくオペラ、等々、プラハに負けず劣らず魅力たっぷり。

こんな解説子の個人的な想いとどまらず、古今東西の音楽家を惹きつける魅力

を持っているのがイタリアではないでしょうか。

本日の1曲目に取り上げたモーツァルトの時代。ウィーンの宮廷において、イタリアの音楽家たちが主流を占めていたことは広く知られています。再び、舞台・映画『アマデウス』を取り上げれば、この作品においてモーツァルトのライバルとして描かれていたサリエリ（1750～1825）。彼は、ヨーゼフ2世の治世下、宮廷作曲家、そして宮廷楽長に任ぜられていました。

モーツァルト自身も、交通手段が発達していない時代にもかかわらず、わずか7歳の時（1763年）以来、3度にわたるイタリア旅行を敢行しています。その影響を受けたといわれる作品は数多く残されていますが、たとえば、1773年のミラノ滞在中に作曲された『エクスルターテ・ユビラーテ（踊れ、喜べ、幸いなる魂よ）』。この終楽章の「アレレヤ」はとくに有名で、年配の方々には、映画『オーケストラの少女』の中で主演のディアナ・ダービンが歌うシーンを思い浮かべられるのではないのでしょうか。

ベルリオーズ（1803～69）は、フランスの若手芸術家の登竜門である「ローマ賞」獲得を目指して何度もチャレンジし、念願の受賞を果たし、奨学金を得て勇躍イタリアへ向かいました。イタリア留学時の作品には、有名な『幻想交響曲』の“続編”といわれる『レリオ、あるいは生への回帰』があります（交響曲『イタリアのハロルド』や序曲『ローマの謝肉祭』など、イタリアに関わる題名をもつ作品は留学時のものではありません）。

メンデルスゾーン（1809～47）には、1830年10月から翌年4月にかけてのイタリア旅行中に着想を得て筆を進め、途中の中断を経て書き上げた作品に「イタリア」の副題をもつ交響曲第4番があります。

チャイコフスキー（1840～93）では、数回にわたるイタリア旅行の印象をまとめた「イタリア奇想曲」が有名です。

前述の「流行歌」を「民謡」と勘違いするエピソードと絡めていえば、圧倒的な管弦楽法を駆使したりヒャルト・シュトラウスの名前が挙がってきます。

1886年の4月から8月にかけてイタリアを旅行したシュトラウスは、そこでの印象を元に交響的幻想曲『イタリアから』作品16を作曲します。この作品は比較的珍しい曲の部類に入り、ご存じの方はあまり多くないのではないかと思います。若き日のR.シュトラウスが自らの音楽世界を表出すべく取り組んだものであり、彼独特の見事な管弦楽法の手腕がすでに発揮されています——解説子程度の演奏技量では「ワーッ！難しすぎて、とても弾けない！」と悲鳴をあげるくらいに複雑で入り組んでいます——。

4つの楽章からなるこの作品ですが、最後の楽章では有名な「フニクリ・フニクラ」をテーマに用いています。「フニクリ・フニクラ」は、ある登山鉄道会社が利用者の拡大を狙った世界最初のコマーシャルソングといわれているものですが、多くの人々が歌っているのを聴いて、シュトラウスは「ナポリ民謡」と勘違いしてしまったようです。「フニクリ・フニクラ」のメロディがそのままに、あるいは、さまざまな変奏で何度も出てくるのを聞いているうちに、「映画音楽」みたいなノリにも聞こえてしまって、思わず笑ってしまうことがあります（急いで付け加えておきますが、解説子は大学オーケストラ時代、年に1度、「映画音楽特集」的なポピュラーコンサートを企画・演奏してきましたので、決してオーケストラによる「映画音楽」演奏を馬鹿にしているわけではありません）。1887年3月のミュンヘンでの初演の際、最初の3つの楽章は賞賛されましたが、この楽章だけが不評だったようです。

さて、シベリウスの作品について述べる場であるのに、ここまでクラシックの作曲家とイタリアのつながりについて長々と書いてきました。ここから、その“言い訳”

といますか、“謎解き”を始めたいと思います。

“北欧”の“渋い、暗い”イメージが強いであろうシベリウス。その交響曲第2番も、彼がイタリアの自然と文化に触れたことによる影響が色濃く反映された作品です。

1897年以來、フィンランド政府から終身年金の給付を受けるようになったとはいえ、必ずしも生計上の余裕はありませんでした。そんな中、親交を結んでいたカルペラン男爵が文化の先進国イタリアから学ぶことの重要性を説き、友人たちから資金を集めてくれたおかげで、シベリウスは一家で1900年秋に出発し、ベルリンでの滞在を経て、1901年2月にイタリアのラパッコ（ジェノヴァの東方約20キロ）に到着しました。

シベリウスは、1894年にもイタリアを訪れ、街の風物や生き生きとした人々のヴァイタリティに感嘆したといわれていますが、二度目のイタリア訪問と長期滞在で、あらためてイタリアの自然と文化に強い印象を受けると同時に多くのインスピレーションを得ました。

フィンランドの自然も、国土の約7割が白樺などの森で覆われ、点在する湖は2万とも10万ともいわれ国土の10分の1を占めるなど特徴ある姿を見せていますが、2月といえば、4分の1が北極圏に位置する故国は冬に閉ざされた時期。それが、彼の地では、対照的に、まばゆいばかりに太陽の光が降り注ぎ、その恵みを受けて咲き誇る花々の風景は鮮烈に映ったことでしょう。

海浜都市で、南国的な美しい保養地であるこの地で、彼は第2番の交響曲のスケッチに取りかかり、しばらくするとフィレンツェに足を伸ばしてみたり、作曲に集中するためなのか、家族を置いたまま単身ローマに行ってしまうたりもしました。こうした時間の経過の中で、ひとつには、キリストに因む文化、思想からインスピレーショ

ンを喚起され、もうひとつには（今回の演奏会の第1曲目『ドン・ジョヴァンニ』とも関わってくるわけですが）、ドン・ファン伝説からイメージをふくらませました。それらは、とくに第2楽章に結実したといわれています。最初ファゴットのモノローグがドン・ファンと石の客のイメージ、すなわち死の客の訪れへの幻想を表し、ヴァイオリンによって奏でられる第2主題がキリストによる救済を表現している、などです（以上の点は、菅野浩和「シベリウス」『北欧の巨匠』音楽之友社）。

5月にイタリアから戻ったものの、すでに国際的な評価を得ていた彼のこともゆえ、席の暖まる暇もなくドイツに赴き、ハイデルベルグ・フェスティヴァルでは自作の指揮にあたりました（このとき、彼より1歳年長のリヒャルト・シュトラウスと親交を結ぶ機会を持ちました）。このため、しばらくの間、作曲の筆ははかどりませんでした。ドイツから帰国後、交響曲の完成に傾注しました。1902年3月8日、作曲者自身の指揮による初演は大成功で、すぐさま3回のアンコール公演が開催されたほどでした。まもなく訪れたベルリンでは、名指揮者フェリックス・ワインガルトナー（1863～1942、1937年に来日し新交響楽団（現在のNHK交響楽団）を指揮しています）が、第2番を詳しく研究したいから楽譜を置いていくようにとシベリウスに依頼し、さらにブライトコップフ・ウント・ヘルテル社から出版できるように取り計らうことを約束しました（菅野浩和『シベリウス』音楽之友社。その後、出版の話は実現し、今日の使用楽譜も同社の改訂新版です）。

ドイツ・ロマン派やロシアの作曲家の影響が色濃かった第1番と比較して、第2番はよりシベリウス独自の個性や特徴が現れていると同時に、随所に明るい雰囲気が出されているのは、イタリアで着想されたことと関係があるとつとに指摘されています。また、ロシアの圧政に対するフィ

ンランドの愛国的心情の発露という意味解釈もされますが、これは、シベリウスと親交の深かった指揮者ロベルト・カヤヌス（1856～1933）によるものともいわれています（カヤヌスのこの曲への思い入れは相当のものだったようで、1930年には、自らがロンドン交響楽団を借り切って全曲録音をするほどでした）。

いずれにしても、第2番は今日に至るまでシベリウスの交響曲の中でもっとも有名な名曲ですが、解説子としては、この作品を入口として、「至高の境地に達した」（菅野浩和）第4番や第7番の交響曲に代表されるシベリウスの後期の作品群にも関心を持っていただければと思います。

第1楽章 *Allegretto*

楽章を通じて音楽的なバックグラウンドとなる弦楽器群によるモチーフで始まり、木管楽器による軽快な第1主題、これに答えるホルンのメロディが奏でられます。ヴァイオリンの情感あふれるメロディ、そしてピッツィカートに続いて、木管楽器による第2主題が提示されます。いったん音楽は静まりますが、それまでの主題や動機を折り重ね、金管楽器が主導してクライマックスに達します。再び、主題や動機が交錯する中で、しだいに勢いをゆるめ、穏やかに曲を閉じます。



ヘルシンキにあるシベリウス公園のシベリウス像

第2楽章 *Tempo andante, ma rubato*

前述のように、イタリアでの印象をもとにした、「交響詩」といえるほどの内容を持った楽章です。コントラバス、チェロのピッツィカートに続いてファゴットによる第1主題が奏でられます。木管楽器、金管楽器も加わり、ひとつの頂点に達します。そして、弦楽器による祈り。音楽は再び熱を帯び、盛り上がり、劇的な楽章を締めくくります。

第3楽章 *Vivacissimo*

弦楽器群の急速なスケルツォとオーボエによるゆっくりとした優美な（イタリア語で *soave*）トリオの対比が印象的な楽章です。スケルツォが回帰し、再びトリオへ。そして、そのまま休みなくフィナーレへなだれこみます。

第4楽章 *Allegro moderato*

「苦悩・混沌を超克して勝利へ」というベートーヴェンの交響曲第5番の解釈になぞらえられることの多いものです。弦楽器による力強い第1主題とそれに答えるトランペット、木管楽器による第2主題、息の長い展開部を経て、冒頭部が高らかに再現されます。拡大した第2主題の展開の後、祈りと賛歌の終結部を迎えます。

（演奏時間：約45分）



シベリウスの生家にあるピアノとチェロ